

## 一つの言葉に佇む

齊藤 梢

歌を読むとき、作者は何を表現したいのか、何を伝えたいのかと、その一首に心を寄せる。歌の解釈は、言葉の一つ一つに添って読みとり、自分勝手に受け取ってはいけない。でも鑑賞は、もっと自由であっていいのではないかと思う。鑑賞の時間は、作者と読者だけのものであって、とても静謐で深いものだとも感じる。一枚の絵に立ち止まる時、その理由を心の中に探さだろうか。ただ、その絵の世界に引き込まれて、佇んでいるというのが、真実だ。多くの歌が生まれている現在であればこそ、じっくりと一首に拘ってみてもいい。一つの言葉に佇むことは、その作者を知ろうとすることでもある。

しづかなる悲哀のごとくわが門の星の明り  
 に向日葵立てり 宮 柊二『晩夏』

雨ののちのぼれる月の照れれども紅は暗し  
 夜の鳳仙花

雨の夜にひとりおもひてさまざまに生活は  
 苦し妻に言はねど

長靴をびしよびしよさせて夜の遅き電車を  
 降りて帰らむ生活

戦争が終わって、三年を経た昭和二十三年の夏の夜、庭に咲く鳳仙花の「紅」を「暗し」と表現した三十六歳の宮柊二。一首目、二首目は、夜の花を詠みながら、自らの心の奥にある感情を表現しているように思う。後に「はなごよみ」「」の中で二首目について次のように述べている。

食物のまだ乏しいときだったが、私には案外強情なところがあつて、乏しさを黙って耐えていた筈だ。それでも歌には矢張りかくせない。(中略) 神経は病的に疲れている。

自身を「俸給取」、「サラリーマン」と言う作者には、家族を支えるための仕事をする日々がある。その中で、歌を詠んだり、ものを書いたりするのは「夜の部の仕事」になる。三首目の「生活は苦し」は、定型という器に静かに入れた独白であろう。言い難いことを、作者は詠んでいる。四首目は、実生活が見えるようで、誠実な孤独なたたかいの歌である。

そして、この時期、戦闘の記憶が作者を苦しめていたのだろうと私は思う。昭和三十年の「彼地の山此地の海」では「小戦闘のなかの出来事ほど記憶がま近くこまかくて、それだからなほ一層に悲惨感を深めて記憶に生きてゐる。」と書いている。「記憶に生きてゐる」という表現は、とても生々

しい。二首目の「暗し」は、このような精神状態であったゆえに感じた「暗し」なのだろう。花は、見る人のその時の気持ちによって見え方が違う。闇の中に月が在り、鳳仙花の「紅」が在る。美しくもあるこの光景を「暗し」と表現する作者の心の暗さにも、私は寄り添いたいと願う。

わたくしのおもひを断ちて励みたる 一日暮  
れきぬ七階の部屋 『多く夜の歌』

体内に黒く拡がる氾濫をふせがんとして歩  
みをり孤り

スタンドが机におとす灯の円を起ち上りざ  
ま闇に見おろす

第六歌集の『多く夜の歌』の一二五一首を読みつつ、作者が歌を詠む夜の時間の闇と静を想像し、孤独と充実を思う。

そして、一首目の「わたくしのおもひを断ちて」の表現に立ち止まる。四十三歳の作者は、富士製鉄の七階で宮肇として仕事をしている。歌人としての夜の時間と、生活者として生きている時間を区別するように「断ちて」と詠まなければならなかった現実があったのだ。この時期に記した「憤り多い時代に生きて」で次のように述べている。

私自身でなくならうとする日常生活の諸断片を高所より  
照射し出して、私自身にたち還ることをつまり生きること  
の意味を呼びかけてくれるものが、私の場合では短歌だといふわけです。だからあつてもなくてもいいといふやうなものでは決して無く、これがあるために自分自身であり得るといふやうな短歌をよみたいと、私は思つてをるわけ

す。

生きることの意味を考え、歌を詠むことの大切さを自己の中で確認する作者。家族八人の暮らしを支え守るために働きながら、精神的にも肉体的にも疲れていたのは確かだろう。「断ちて」は、心の真実を表している。

二首目は、四十六歳の時の作品。表現されている心情は、作者でなければ真に分らないが「黒く拡がる氾濫」は何か、何を独白しているのかと、この一首に私は長く佇む。選者としての仕事も多くなり、身体の疲労は精神にも及んだに違いない。黒く拡がるものの氾濫を止めようとして歩く作者は、やはり「孤り」を意識する。戦闘の記憶を持ちながら、懸命に生きている作者の心労、そして「氾濫」を思う。

三首目は、何気ない場面を詠む歌だが、日常生活にある「灯の円」という小さな発見を詠んでいて、好きな一首だ。

胸ぞこの底滓のごとき寂しさを手掴みに掴  
み投げ棄てたきを 『獨石馬』

胸の裡騒ぎてひとり思ふなり臘膈獸のごと  
老いてゆくのか

一漣なる感じ、草むらのひとつとつところに陽  
は差してゐて

一首目は、昭和四十四年の作品。五十七歳の作者は、この年の一月に糖尿病のため入院している。四十八歳の時から糖尿病の診療を受けていたのであるから、身体の疲労は積み重なり、体をベッドに休める日もあったのだろう。昭和三十九年、五十二歳の時に書いている文章を見てみたい。

私は従軍し、戦中戦後の生活を持ち、そうした生活のなかで身近に肉親に病人をみとる体験を持ってきた。戦死、戦病傷者を周辺に持ち、険しい時代の生活を経、また、病人というものが、自分自身にも、周囲にもどんなに孤独でどんなにつらい心理的、経済的な環境をつくり出すものであるかも知ってきた。そうした中から今日まで生き残らせてもらっている一人、病むことなく今日まで生き返っている一人、そうした自身を振り返ると、力乏しい者ながら、その乏しい力なりに一生懸命生きてみるのが、亡き友人、病む人びと、さらに自分に対しても、大切な義務であるように思える。

一生懸命に生きるという覚悟は、作者の心にずっとあり続けたのだと思う。しかし、自分自身ではどうにもできない病にしないで疲弊してゆき、老いを感じるようになる。「手摺みに掴み投げ棄てたきを」というような、気持ち晒す詠み方に心の葛藤を知る。

二首目の「膺胸獣のごと」という比喩は、とても寂しい。自分の老い衰える姿を膺胸獣の姿に重ねつつ、作者は独りの世界に居る。

三首目は、五十九歳の作品。私はこの「一涯なる感じ」の「一涯」という言葉がとても気になる。「一涯」とは何かと、さまざまに考えてみるけれども、なかなか答は出ない。老いてゆき、病んでゆく時間の中で「一涯」を見ている作者ひとつところに集まっている陽ざしを見て感じたことだけけれども、なぜ「一涯」なのだろうか。この一首に長く寄り添う

時間の中で、作者と同じような感覚になることができるのだろうか。歌を読むことは、作者と対話することでもあると思う。

宮終二の作品と文章を読みながら、励まされることがある。「人生とうたごころ」には、心に届く一文がある。

人生は易々たる道程ではなく、むしろ反対に険阻けんそなそれであるとうわたしには感じられます。険阻な現在が放ち示している意味を懸命に深く享受し、またある場合では絶望に追いかけれながらも、憧れや祈りを捨てることが出来ない胸中、そうした胸中で詩は育まれていくように思います。

私はこの文章を読んで、絶望の時にあっても明るさへと向かって詠んだ大西民子の次の一首を思う。

てのひらをくぼめて待てば 青空の見えぬ傷  
より花こぼれ来る 大西 民子『無数の耳』

作者が四十二歳のときに刊行された第三歌集『無数の耳』に収められているこの歌を、私は長く心に置いてきた。平成二十七年「コスモス」七月号の「新・評論の場」においても、この歌について書いている。

「てのひらをくぼめて待てば」は、その行為に至る理由を排して、いきなり「待てば」という行為と願望で始まっている。青空に「傷」を見ながら、そこから流れるものを「血」ではなく「花」としたところに、自己救済がある。大西民子『悲歌』というイメージを取り払って、真摯に生きていこうという決意がこの歌にはあるのではないか。

以前にはこのように書いているが、今この一首を見つめると「見えぬ傷より」の「傷」の一語に佇む。

帰らざる幾月ドアの合鍵の一つを今も君は  
持ちゐるらむか  
『まぼろしの椅子』

ドラマの中の女ならば如何にか哭きたらむ  
灯を消してわれの眠らむとする

かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待  
つ夜もなし今は

昭和二十四年秋から三十年までの歌を収めた第一歌集『まぼろしの椅子』は、昭和三十一年に刊行された。この時期は、すぐれた歌集が次々と世に出ていて、中城ふみ子の『乳房喪失』の刊行も、昭和二十九年である。昭和二十二年に、大西民子は結婚しているが、昭和二十八年頃から夫と別居。二十三年には、子を早死産している。家に帰らない夫を待つ日々、心情をストレートに表現している歌が並ぶ。

夢のなかといへども髪をふりみだし人を追  
ひるきながく忘れず  
『不文の掟』

病むといふ噂を聴けばまた惑ふいつまでわ  
れを放たぬ夫か

待ち得しもの幾ばくぞ十年目白髪のためだ  
つ君を見しのみ  
『無数の耳』

うつし世の最後の逢ひと思ふ日に人は喚き  
つわれを詰りて

昭和三十五年に第二歌集『不文の掟』は刊行されている。一首目は、夫を待つことの苦悩を表しているが、現実の作者

は「髪をふりみだし」たりはしなかったであろう。二首目も、思いのままに詠んでいる。三首目は、「訣別」の二首目の作品で、作者は昭和三十九年の六月に夫と協議離婚をしている。十年もの長い間、夫のことを待ち続けて苦しんだ。夫のことを「人」と詠み、「君」とも詠んで暮らしてきた年月が詠むことにより残ったとも言える。

『無数の耳』を読み進めると、三首目と四首目の間に「てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ傷より花こぼれ来る」の一首がある。告白の歌に留まることなく、表現の幅を広げているのが伝わってくる。晴れた空から花びらがこぼれてくるといふ光景を想像すると、美しい歌ではある。しかし、この花びらは空にある「傷」からこぼれているのだ。「見えぬ」と詠んではいるが、見えているからこそこの「傷」であろう。「傷」は心にある夫との訣別による「傷」で、「見えぬ傷より花こぼれ来る」は、悲苦があっても懸命に生きていこうとする意志を表現していると思う。

帰り来てしづくのごとく光りぬしゼムクリ  
ツブを畳に拾ふ  
『風の曼陀羅』

第九歌集『風の曼陀羅』は平成三年刊行の生前最後の歌集。何気ない日常を詠んでいるこの歌の「しづくのごとく光りぬし」の「しづく」を、私も私の暮らしの中で見たいと願い、感じたいと思う。宮柊二が感じた「一涯」、大西民子が見た「傷」は、苦しみなながらも懸命に日々を生きることによって生まれた言葉だろう。表現と真に向き合ったからこそその言葉の一つに佇みつつ、作者の葛藤と生き方を深く思う。